今月の窓　（土地総研メールマガジン第 84 号）

シェア・エコノミーと混雑現象

日本大学 経済学部 教授　山崎 福寿

先日、ニューヨークに住む友人からこんな話を聞きました。いま、アメリカの大都市の公共的なトイレで興味深いことが起こっているというのです。アメリカでは LGBT と呼ばれる人たちの権利を保護する活動に注目が集まっています。これまで、こうしたマイノリティの人権が十分に保障されていたとは言えませんでした。そうした人たちの権利や生活を守るために、いろいろなところで改革が進んできています。

トイレはその典型です。とくに、公共的なスペースにあるトイレでは、男性の恰好をした人が、女性のトイレに入って行けば、他の女性たちはびっくりするでしょうし、それに抵抗を覚える女性たちもたくさんいます。そうした人々の反応は LGBT の人たちにとって、たいへんな精神的苦痛でした。

こうしたマイノリティの人たちのトイレの問題を解決するためには、ユニセックス用のトイレを設置することが必要です。それはそんなに難しいことではありませんでした。男性も女性も同じ空間を共有することを可能にするトイレがあれば、この問題は解消します。

つまり、このトイレは男性も女性も同時に使用することが可能だという表示を付けておけばいいのです。そうしたトイレを使うのはどうしても抵抗があるという人たちには、女性専用（あるいは男性専用）のトイレを準備しておけばいいでしょう。そうした工夫によって、LGBT と言われるマイノリティの人たちの人権やプライバシーを守ることが可能になりました。

しかし、実はこうしたユニセックスのトイレを新たに設けることによって、思わぬ効果が表れてきています。それは女性のトイレに共通の問題である待ち行列が短くなったというのです。駅のような公共的なスペースにあるトイレでは、男性のトイレではあまり見かけませんが、女性たちがトイレの外まで長い列を作って待っている光景がしばしば見受けられます。これは男性よりも女性の方が用を足すのに時間がかかるという事情から生じる問題です。

この男女共用のトイレの空間を新たに付け加えることによって、相対的に男性用トイレの数を減らしました。女性用トイレのスペースを維持したうえで、男性用のトイレの数を減らし、その部分に男女共用のトイレを設置したことで、女性の待ち行列の長さが極端に短くなったというのです。もちろん、それで男性の待ち時間が増えては意味がありませんが、そうはなりませんでした。

日本でも居酒屋などに入ると、男性用・女性用と分かれていたトイレがしだいに共用になっていることに気づかれる読者がいるかと思います。こうしたちょっとした工夫によって、トイレの待ち時間を減らすことが可能になったのです。

これも一種のシェア・エコノミーと呼べるかもしれません。男性と女性が一定の空間をシェアできることになったので、待ち行列の長さが短くなり、待ち時間を節約できるようになったのは、ウーバーのような相乗りできるタクシーや、WeWork のようなコーワーキングスペースに代表さ

れるシェア型のサービスと同じだと思われます。これによって未利用スペースが減り、スペースの効率的利用が実現したのです。

映画館やコンサートホールなどでも特有の混雑現象が起こります。ある特定の時間にトイレの使用が集中することです。こうした集中する時間の混雑を緩和するためには、もちろんトイレの数を増やせばいいに決まっています。しかし、その特定の時間を除けば、トイレの利用者はほとんどゼロに近いのです。したがって、トイレの数を単に増やすのはムダなことです。

こういう一時期にある特定の空間の利用が集中するという現象は、都市の共通の現象として観察されます。昼間の電車の混雑や高速道路の混雑、また都市中心部の一般道路の渋滞といったものは、このように設備の容量が一定であるのに対して、ある特定の時間だけ利用が集中するといったことから生じます。

首都高速道路の夜間の利用は相対的に少ないので、混雑や渋滞はほとんど発生しません。また、お盆の時期や年末の帰省時の高速道路の渋滞は、一時的に需要が集中するといったことから発生します。電力についてはもっと深刻です。電力需要がその供給量を一時的にでも超えると、地域一帯に停電が発生し、復旧には長い時間を必要とします。

つまり、こうした混雑現象は一定の地域にたくさんの人々が居住し、そこにオフィスや人々が集中して立地する結果、道路や鉄道、電力やガスといった都市に必要なサービスに対する大量の需要が一時的に生じ、都市的なサービスを供給するインフラの供給量が絶対的に不足することから生じます。

さきほど述べたようなトイレで生じた予想外の効果のように、ちょっとした工夫で都市のスペースをもっと効率的に利用することが可能になるのではないでしょうか。